

武蔵野市第四期基本構想・長期計画テーマ別市民会議

「団塊世代の主張」 第1回会議 会議要録

日 時：平成15年12月9日（火） 午後7時～9時

場 所：武蔵野スイングホール スカイルーム3

出席委員：7名

1 福祉保健部長あいさつ

2 委嘱状交付

委員7名に委嘱状が交付された。

座長は、武蔵野市第四期基本構想・長期計画テーマ別市民会議「団塊世代の主張」設置要綱に基づき、亜細亜大学国際関係学部教授 栗田充治氏が指名されたことが報告された。

3 会議の運営等について

生活福祉課長より説明

(1) 本会議設置の趣旨並びに全体スケジュール

(2) 市民アンケートの実施、電子会議室の開設

会議の運営については、委員全員の合意により次のとおり決定した。

(1) 会議要録を作成し、毎回市のホームページ上（以下 HP）で公開することにより、会議の内容及び進捗状況を随時、市民に報告していく。発言者名は「委員」とする。

(2) HPに掲載する委員名簿の項目は、「氏名」「性別」「住所（一部）」「職業」とする。

(3) 一般論ではなく、団塊世代の生活人として地に足のついた発言、提案等を活発に行う。ついでには、会議の傍聴は無しとし、（個人的な体験等を含め）自由闊達な意見交換が出来るようにする。

(4) 日程は、毎回終了時に、座長と委員の都合により次回分を決定する。

4 意見交換

委員：自己紹介を兼ねて、この会議に参加した思いを語ってほしい。

委員：昭和22年生まれ。33年間の会社生活を経て昨年退職し約1年半が経過。60歳台半ばの方々がサークル活動などで積極的に活動しているのに比べて、同世代には集まる場がないと感じている。私の経験は、団塊世代が退職したときに感じる気持ちに近いと思うので、それをこの会議に生かしたい。いわゆる「無職」となり、社会の中である種カテゴリ化をされていることに気付いた。「retired（退職者）」と「unemployed（無職者）」とは何か違うのではないかと感じている。

委員：昭和25年生まれのいわゆる団塊世代。仕事をやめた後に大切なことは「地域の仲間」だと思う。それも、自分たちの経験が生かせるボランティアのようなものがよい。「やりがい」「生きがい」に通じるところがある。でも、あと10年はバリバリ働きたい。

委員：昭和23年生まれ。学校を卒業後、8年ほど出版社で勤務し出産後退職。その後の4分の1世紀は専業主婦。いつも、自分は団塊世代であると意識してきた。私は、老後において大切なことは健康だと思う。私は日頃からスポーツで体を鍛え、健康を維持している。息を引き取る瞬間まで健康、元気でいたい。夫ももうすぐ定年退職なので、2人で趣味を生かして、地域を基盤に「無借金」で事業を始めたい。

委員：広告代理店勤務。70～80年代にかけて、新しい職種として様々な職業が生まれたが、私は、その中で「広告ビジネス」に興味を持ち今の会社に入社した。我々の時代のCM業界は新しい分野で、仕事のやり方もかなり自由が利いた。会社自身もすべてが暗中模索というところで、私自身は自由人のように過ごしてきたので、会社に「管理されている」とか「従属している」とは感じなかった。が、ふと気付くと、今度は自分が管理する立場になっており、定年カウントダウンの今、遅まきながらやはり「会社人間」だったのかと思ひ当たることもある。そこで、これからは生活の軸を地域社会に据えて行こうと考え、この会議に参加したが、私と同世代の方が何を考えているのかに興味もあった。個人的な意見だが、今後（少子化等の税収不足で住民サービス低下が予想されるなか）、市も税収以外で稼ぐことを考え、それを住民サービスという形で還元してはどうか。例えば、団塊世代が各々蓄積してきた経験やノウハウを活かしたビジネスをモデル化して販売し、その分で税金を下げたり、サービスを充実させてはどうか。

委員：私は職場が武蔵野市で、昭和24年生まれ。今は薬剤師、ケアマネージャーをしている。仕事上忙しい毎日を送っているが、この会議に参加することになり、ふと、老後に自分は何をしているのだろうか考える機会を得た。現在、お年寄りと接していて、自分の老後を考えると、ヒントになることが沢山ある。例えば、今の介護保険では賄えない「冠婚葬祭に行く際の付き添い人」や「旅行に付き添うヘルパーさん」への報酬などが公的に何とかできるようになれば、より多くの高齢者が、もっと生きがいを持って生活できるようになると思う。団塊の世代が高齢者となった時、もっと夢のある老後を実現したい。ムーバスなど武蔵野市は全国に発信した新しい施策を実現したこともあり期待は大きい。「車椅子で入れるトイレ付きバス」、「介護ヘルパー付き宿泊施設での介護旅行」など実現できればと考えている。会議では、皆さんと一緒に私たちの老後のしくみ作りに関わっていきたいと思う。

委員：昭和22年生まれの団塊世代。少し前まで仕事（保険業の管理職）をしており、現在の職業を「主婦」「無職」と答えることには抵抗があるので、「リタイア」と書くようにしている。「リタイア」は大切なカテゴリだと思う。最近、某スーパーで会員カードを切り替えようとしたとき、職業欄にリタイアと書いて説明したが切り替えを断られた（最終的には可となった）。これからは多くの団塊世代が定年を迎えて退職するが、このようなことが世間で増えていくのだろうか。退職後の半年間はやや違和感を覚え、普段の生活では戸惑いもあったが、現在は趣味もあって充実した生活をしている。しかし、同じ世代の人の中には定年後にうまく生きていけない人も出てくるのではないかと危惧している。年金問題にしても、私たちの世代がちゃんと生きていかないと、若い人が年金保険料を払うことを不満に感じてしまうのではないかと。また、私の場合は、配偶者が出身地で議員になったことを機に離婚したが、これからは必ずしも夫婦揃って老後を生きるとは限らない、シングルで老後を生きる人がいることも想定したほうがよいと思う。

委員：昭和22年に、地方で生まれた。学生時代はいわゆる学生闘争の頃で、授業らしい授業もなく、たくさんの本を読んだり、盛んに仲間と議論をしたりしていた。その後、大学に勤めることになった。湾岸戦争の頃、学生たちを集めて中東に行ったことがきっかけで、ボランティアに興味を持つようになり、阪神大震災、台湾地震の際にボランティア派遣をした。学生がボランティア活動を通して成長するプロセスには感動した。退職後は、ボランティアの研究を仲間と続けて「余力」のある生活をしたい。一つ気になることは、いわゆる「世代間倫理」をどう捉えるかだ。環境問題も、年金問題にも、若い世代（あとの世代）を見越した倫理が求められている。私も若い者から厳しい目で見られるとき

がある。人間に必要なのは「所属」「役割」「人間関係」だと言われるが、リタイアすると全てを失ってしまうので、この3つを地域の中でどう見出していくかが、この会議の視点になる。これらを含め、私たちの世代が今、そしてこれからどのように生きていくかということは重要。地域としては、ボランティアセンターで実施している「お父さんお帰りなさいパーティ」のような「ボランティア活動への助走となるような仕掛け」が必要ではないか。

委員：アメリカでは早期退職は企業年金の優遇になるらしいが、私も、会社が56歳で役職定年制度を設けたこともあり55歳で早期退職した。「辞めて何をするのか」と皆に聞かれた。「お父さん…」にも出たが、自分にできそうなものが少なかった。「既存のボランティア活動」にはめ込まれる感じは、団塊世代には飽き足らないのではないかと。自分の技術や趣味を生かして、新たにボランティアを開拓していく精神があると活動もより充実すると思う。武蔵野市でもボランティアを利用しながらいろいろな市民講座を開設してはどうか。ところで、アンケートの内容は決まっているか？

事務局：団塊世代を対象に実施する。詳細は検討中。提案があれば承る。

委員：企業に所属していると、その中でグループが形成され、定年後もその仲間と、例えばボランティア活動が続く、という話を聞いたがどうか。

委員：工場勤務者にはあったが、私のような営業職は転勤もあってグループへの所属は困難。

委員：定年後は地域に戻ってくることが多いので、企業より地域のグループにより重きが出てくるかもしれない。

委員：武蔵野市にある企業の場合はどうか。

事務局：一部、高齢者の配食ボランティアをしている企業はある。

委員：ボランティアは、とにかく楽しくやれることが大切だと思う。TVで見る海外のボランティアは、どれも楽しそうで、そういうものが地域でできるとよい。楽しければ長続きもすると思う。

委員：私が思うに定年後に大切なのは、1つ目に、今まで成し得なかった趣味をしっかりとやれること、2つ目に、ボランティア活動などで世の中に役立つこと。3つ目は、年金だけでは収入が不安なこともあり、働ける限りは働くこと。例えばアメリカのある州では、障害者でも働ける方は働いてより多くの収入を得て納税している。「高齢者」という表現も、今の世の中では、必ずしも65歳以上の方を指すものではないように感じる。

5 その他

次回は、平成16年1月27日(火)午後7時。場所は、事務局より後日連絡する。